

I

問一

ある対象が特定の美的概念で呼ばれる根拠は、歴史上のある時点における特定の社会・文化がそうした美的反応を共有し、その対象をそのように名指したからだと言いたいような感じがするという、歴史の事実としての解釈学的な回帰があるということ。

問二

「非美的な特徴」とは、対象自体が客観的にもち、人間が五感によって知覚したり物理的に記述したりできる感覚的な特徴の一種であり、人間はそうした特徴に対して、感覚にとどまらない特定の美的なやり方で反応することで、主観的な経験の実質である「美的質」を得ることができる。

問三

歴史相対的な特定のコンセプトのもとで、対象の感覚的特徴を美的に秩序立てる、社会的、文化的、慣習的なふるまいを習得することによって美的質の共有が可能である以上、幽玄や「さび」という日本人に特有とされる美的質について、西洋人であるがゆえに完全には理解できないというのは理不尽だから。

問四

美的概念の本質を、美学的理論の統一的根拠から体系的に分化させ、各々の概念の特殊性を理論的に基礎づけて、日本的、西洋的といった区分を無意味だとする大西の普遍主義は、美的質は特定の社会・文化・歴史に規定された個人の主観的な経験の実質であるとする、筆者が主張する美的フレーミングの相対主義とは相反するから。

Ⅱ

問一

慣れない東京で深夜になっても帰って来ない母の状況を想像し、不安が高まり緊張している緑子の心理を察した夏子は、悪い予想は実現しないという自身の経験に基づく縁起かつぎを強調して伝えることで、緑子の不安を少しでも軽くしてやりたいと思ったから。

問二

悪い予想は実現しないという夏子の語るジンクスは信じかねる部分もあったが、緑子は自分なりに考えを巡らせていた。そのとき、傍らにいた夏子が急に立ち上がろうとしたので、不安から過敏になっていた緑子は動揺し、夏子までいなくなるような漠然とした恐れを感じ、夏子に離れて行ってほしくなかったから。

問三

電子辞書で言葉を調べ自分なりの納得を繰り返すうちに、緑子は知的興味が湧き興奮を覚えていた。その様子を察した夏子は、自分が長々と語るより、緑子自身が電子辞書の世界に没入することで、帰らない母への不安を少しでも忘れてほしいと願うとともに、悲惨な言葉を電子辞書で引くことで母の無事を願う緑子の思いに寄り添っていたとも思ったから。

問四

想像した悪いことは実現しないというジンクスを信じて二人で悲惨な言葉を電子辞書で引き、夏子はその言葉から思いつくことを熱心に話すということを繰り返し、二人は、現状に憂慮がありつつもその現実とは異なる世界に没入していたが、外部からすさまじい音が聞こえたことで、突然現実に引き戻されたような衝撃を覚え、狼狽したから。

Ⅲ

問一 和歌の文法や仮名遣いをいい加減にごまかしております歌人が歌を詠むということはなんといってもあつてはならないことでございます。

問二 花が咲いたならば、露が花にかかるように、涙を流して私を恋い慕ってくれと思って、亡くなったあの人はこの木を植えたのだろう。

問三 初句の「するがなる」の表現に悩み、定家、慈円に相談したものの、答えを得られなくて残念に思っていたところ、慈円が「風になびくふじの煙」と吟じていたのを立ち聞きして、初句の表現にふさわしいと思ったから。

問四 柿本人麻呂の「ほのぼのとあかしの浦」と詠んだ歌は、心に浮かんだ情景が明石から別の場所に移って、例えば上の句が「高砂やこの浦船に帆をあげて」と高砂の地になったとしても、心のままにしっかりと詠んだものならば歌として成り立っているということ。

問五 歌題にしっかりと向き合い、技巧をこらさずに、正しい文法や仮名遣いに基づいて、心に思い浮かんだことをありのままに詠み出し、納得のいかない表現があれば改めることで、誰にでも理解しやすいように詠まれた歌。

Ⅳ

問一 都の門はその国を表しており、犬の国に使いした者は犬にふさわしい小門から入るしかないということ。

問二 まさにこのもんよりいるべからず（と）

問三 斉の都には、住民一人一人が袖を広げれば幕のように切れ目なく見えるほど、汗を振り払えば雨のように見えるほど、多くの人が暮らしているということ。

問四 斉の国にそれほど多くの人がいるのならば、どうしてお前を使者として遣わしたのか。

問五 斉の決まりにのつとると、外見からしか人物を判断できないような愚かな王への使者は晏嬰のようなものとも愚かな者がふさわしいということ。